

魏晉南北朝時代の貨幣經濟

宮 澤 知 之

緒 言

後漢末以後隋の統一まで四〇〇年近くの間、中国は政治的分裂の時代であつた。政治的分裂は戦乱を伴ない、しばしば国土を荒廃させる。とくに華北は華中南よりも王朝の交代が頻繁であり、国土の荒廃も深刻であつたとされる。しかし華北の戦乱による荒廃をあまり過大に見積もつてはならない。農業生産では華北乾地農法が北魏の賈思勰によつて体系化され、黄河流域は養蚕絹織業のもつとも盛んな地域であつた。一方華中南では魏晉南北朝時代を通じて地域開発・定住化が進行し、中国經濟に占める華中南の比重は次第に大きくなつてゆく。かくて隋唐以降、中国經濟の中心は次第に北方から南方に移り、唐宋変革期に南北の經濟的地位の逆転が決定づけられた。以上のことは通説として承認されていると見てよいであらう。魏晉南北朝時代、華北の華中南に対する經濟的優位は揺ぎ始めたが、中国經濟の先進地といえやはり華北（黄河流域）であつた。

ところがいわゆる貨幣經濟の水準に関する評価では、とくに南北朝が対立した時期について北方の自然經濟に対する華中の貨幣經濟を対比する学説があるように、長江流域における貨幣經濟が高く評価されることがある。¹⁾この場合華北（黄河流域）の經濟は主として農業・手工業といった生産部門が注目されるのに対し、華中（長江流域）では主として貨幣流通に着目し展開された議論であるという違いがある。このように南北の經濟水準に関する学説

には観点の違いがあるが、流通経済に関して言えば、長江流域の方がより活発に展開したという認識が一般的であろう。つまり中国全土を鳥瞰すると、生産経済と流通経済の中枢地域が一致しないという認識が広く見られるのはなからうか。

ところで貨幣経済・自然経済という評価には、それらの概念自体に研究者によつてかなり異なる理解がなされてきたという問題を含んでいる。私はかつてこの問題に関する学説を整理し、私自身の観点を提示した。すなわち貨幣経済とは財政的物流と市場的流通という次元を異にする二つの流通経済を含む概念として設定すべきこと、財政的物流とは国家が財政を通じて直接間接に組織し誘導する物流と、官需物資を租税や市糶等を通じて国家に集中しまた俸給や公共事業等を通じて社会に再分配する物流からなること、貨幣は二つの流通経済のどちらも表現すること、貨幣は金属貨幣だけでなく実物貨幣も含めて考察する必要のあること、貨幣は流通経済の媒介物としてだけ存在したのでなく、国家の社会経済的統合の手段としての機能を有することなどである。このような視点からすれば魏晋南北朝時代、南北ともに貨幣経済が展開したと捉え、その上で南北の貨幣経済の質的な違いこそ問題としなければならぬ。表面的には華北の方が華中南よりも実物貨幣が広範に用いられたという印象が強く、当然それに表現されるはずの貨幣経済の構造の違いを総体的に論じる必要がある。しかし実物貨幣も含めた議論は課題が大きすぎ、小論で扱うことは困難である。そこで本稿では金属貨幣の問題にしばらく、この時代の貨幣経済の状況の一端を論じることにした。

一 短陌

まず六朝時代の貨幣現象としてよく知られている短陌の問題を取り上げる。この時代の短陌についてはとくに梁代のものが有名であり、これまで提出された諸学説も主要には梁の短陌について考察したものである。まず呂思勉

氏は、短陌は錢の流通の壅塞によつて貨幣価値が下落した現象であるとし、一方、何茲全氏は短陌は通貨不足によつて貨幣の価値が上昇して発生した、すなわち少量の貨幣量で多額の価格を実現したものとした。この何氏の説が中国では現在もお通説の位置を占めている。⁽⁴⁾ 両氏の見解は、貨幣価値の変動の向きについて対蹠的であるが、いずれも特に銅錢や鉄錢といった錢の種類にかかわらずに発生すると認めているように読める。これに対して彭信威氏は、梁の短陌は銅錢の鉄錢に対する比価が上昇したものとし、短陌が二種類の貨幣間に発生すると認めた。ただし彭氏は、晋の短陌については、貨幣の不足によるものとしており、晋と梁の短陌を異なる原理で説明している。⁽⁵⁾ 日本では、川勝義雄氏は梁の短陌を銅錢鉄錢併用のもので鉄錢による物価騰貴と地方的格差を示すものとし、越智重明氏は銅錢を前提にせずに鉄錢の価値が下落したものとした。⁽⁷⁾ また井上泰也氏は銅錢の鉄錢に対する相対的価値上昇をおさえるため銅錢の束の中身をへらしたものとする。⁽⁸⁾

以上日中の諸学説は、銅錢もしくは鉄錢の価値変動、あるいは銅錢と鉄錢の交換比というように、短陌を貨幣価値の問題として捉えることで共通するが、近年これとは全く発想の異なる学説が現れた。安田二郎氏は、短陌は良質の法貨を基準とした劣悪錢との兌換という事柄ではなく、長錢と短錢はまとまった一個の単位的な通貨として機能したものとし、⁽⁹⁾ 中国では程民生・張瑞生⁽⁹⁾ 両氏が短陌は貨幣価値の問題ではなく長短の差額から不当利益を得る一種の用錢方式としたのである。⁽¹⁰⁾

これらの学説を大きく分類すると、

(一) 短陌を貨幣価値の問題と見るか (呂、何、彭、川勝、越智、井上)、貨幣価値とは無関係と見るか (安田、程・張) という対立、

(二) 短陌は銅錢と鉄錢、あるいは好錢と悪錢という二種類の相関関係から発生したと見るか (川勝、井上)、二種類の錢貨の相関関係でなく、ある一種の錢貨の固有の事情から発生したと見るか (呂、何、安田、程・

張、越智) という対立、

(三) 梁の短陌について銅錢に出現したと見るか(彭、川勝、井上)、鉄錢に出現したと見るか(越智) という対立、

のように整理することができ、これらが組み合わされて主張されていることが分かる。

この時代の短陌を研究する場合、資料が相対的に多い梁の短陌の考察が中心となるのは当然としても、断片的に伝わる他の六朝諸王朝の短陌も同時に説明しうる解釈をとる必要があるだろうし、実際これまでの短陌に関する学説も基本的にはそのように考えてきたと思われる。なぜならそうしなければ彭信威氏のように王朝ごと異なる發生の原理を想定せざるを得なくなるからである。私は六朝時代を通じて同一の原理で説明するほうが良いと考える。

また短陌慣行は唐宋時代にも広く見られ、銀經濟が普及した清代にも見られた。とくに六朝に続く唐宋時代の短陌については研究の蓄積も多く、私も唐宋時代の短陌をとりあげ、その内容と意義を論じたことがある。⁽¹⁾六朝時代の短陌と唐宋以後の短陌が全く同じ内容であるかどうかの一つの問題である。また私見では清代の短陌は、惡錢と好錢の交換レートであり、その後には財貨の交換価値を統一的に計量しうる銀が存在した。唐宋と清の短陌は前提となる通貨事情が異なっている。六朝時代は唐宋時代と同様、銀經濟の普及を考慮に入れる必要はなく、その意味で唐宋の短陌は六朝の短陌を考察する上で参照可能である。それゆえ本章では唐宋の短陌研究で得られた知見を参照しこの問題に接近したい。

さて宋代の短陌には三種類がある。第一は、唐代以来の短陌政策史の展開の結果成立した宋朝の會計制度の短陌すなわち省陌である。省陌と足陌の換算は比例計算で行い、省陌の値は比例定数として機能する。第二は紙幣と鑄貨のレートとしての短陌であり、異種貨幣間に発生したが、社会的評価の低い一方の貨幣が高額面(少なくとも一〇〇文)で固定されることが必要条件である。この種の短陌と足陌の換算方法は、例えば七五陌の場合貨幣の枚数

が一枚から七四枚までは、それが表示する価格も枚数と同じで一文から七四文であるが、七五枚になると一〇〇文と数えるというように、貨幣の枚数とそれが表示する価格の間に比例関係が成立せず、短陌は位取りとして機能する。第三は商品経済に関わる短陌で、業種別の行が主体となつて任意の値を採用したものであり、貨幣の価値と短陌の値には何の関係もない。この短陌は当然ながら異なる種類の貨幣間で発生するのでなく、単一の貨幣のなかで現れる。換算の方法は第二の短陌と同じと推定できる。これは官銭の使用を前提とし、独自の用銭方法をとること、陌を単位とする事実上の「私鑄銭」の意味を有していると理解できる。このように三種類の短陌は性格の違うものであるが、共通する面もある。それは、短陌とは幾ばくかの銭を陌から控除し貫から控除するのでないこと、陌の実質が異なつても名目の額面が等しければ等価と観念されることである。

宋代の短陌を、六朝時代に社会的に見られた短陌を考えるための参考にするには、宋代短陌の成立した条件を忘れてはならない。第一の省陌は、宋朝の国家財政上、政治的に決定した独特の短陌であるから六朝社会に展開する短陌とは無関係であり、第二の短陌は高額面の紙幣の特殊性に基づいており、南朝に宋の紙幣に相当する少なくとも一〇〇銭の価値を刻印した高額面の銅銭が一銭の価値をもつ鉄銭と社会的に意味を持つ一定の数量をもつて同時通用したことはなく、また逆に高額面の鉄銭が銅銭と同時に通用したこともない以上、関係がうすい。^⑪第三の短陌の本質は陌の値が異なれば、異なる貨幣であることにあり、業種別に異なる値が存在したことを除けば、この時代に適用可能である。但し、成立の条件は一〇〇単位の計数が成立していることである。陌を単位とする貨幣という考えは、長銭と短銭をまとまつた一個の単位的な通貨と考える安田説と同じである。私は六朝時代に社会的に見られた短陌が宋代の第三の短陌と基本的に同種であると仮定し、それで説明できるかどうかを試して見たい。^⑫

宋代の第三の短陌の知見を適用すれば、周知の梁の短陌記事は次のように解釈できる。

「[A] 普通中に至り、乃ち尽く銅銭を罷め、鉄銭を更鑄せんと議す。人鉄賤しく得易きを以て、並びに皆な私鑄

す。大同已後に及んで、所在の鉄錢、遂に丘山の如く、物価騰貴す。交易する者、車を以て錢を載せ、復た數を計らず、而して唯だ賈を論ず。商旅姦詐にして、之に因りて以て利を求む。破嶺自り以東、八十を百と為し、名づけて東錢と曰う。江・鄆已上、七十を百と為し、名づけて西錢と曰う。京師は九十を以て百と為し、名づけて長錢と曰う。中大同元年、天子乃ち詔して足陌を通用せしむ。詔下るも人従わず、錢陌益ます少し。末年に至り、遂に三十五を以て百と為すと云う。〔『隋書』卷二四、食貨志〕

〔B〕詔して曰く、……頃ごろ聞くならく、外間多く九陌錢を用う。陌減ずれば則ち物貴く、陌足れば則ち物賤し。物に貴賤有るに非ず、是れ心に顛倒有り。遠方に至りては、日に更に滋ます甚し。豈に直に國に異政有らんや、乃ち家に殊俗有るに至る。徒に王制を亂し、民財に益すること無し。自今足陌錢を通用す可し。令書行するの後、百日を期と為し、若し猶お犯すこと有らば、男子は謫運、女子は質作すること、並びに同に三年とす。〔『梁書』卷三、中大同元年七月丙寅〕

〔A〕の記述は普通年間（五二〇—二七）・大同（五三五—四六）以後・中大同元年（五四六）・末年と、鉄錢の動向にかかわる一連のまとまった記事である。それゆえ短陌は鉄錢の行使について発生したと見るのが自然であり、とくに銅錢との關係を想定する必要はない。このことは短陌は単一の貨幣に発生するという仮定に違反しない。中大同元年、梁朝は重い刑罰を科して足陌を強制したが実効はなかったという。京師から離れるほど、また梁末に近づくほど社会では陌の値が小さいというから、陌の値は國家の權威・統治力の強弱と關係しているようである。梁末に至っても國家の用錢方法では足陌を堅持したはずであるが、とすれば國家と社会との間で用錢方法がますます乖離し、國家の貨幣政策がいっそう実効を失ったと理解できる。國家の足陌錢の使用と社会の短陌使用というように貨幣使用の方法が二元的に分れた状況は、唐代にも見られた現象である。

「陌減則物貴、陌足則物賤。非物有貴賤、是心有顛倒。」〔B〕という表現は、當時の「所在鉄錢、遂如丘山、物

価騰貴。」「A」という状況とあわせて理解すると、名目一陌銭という集合の実質が減ると（陌減）物の価格が高く
なり（物貴）、名目と実質が一致すると（陌足）物価が低くなる（物賤）という意味であることは疑いない。そう
すると、ここでは、一枚一枚の銭の価値ではなく、陌を単位とする銭の集合の価値と物価の相関関係が述べられて
いることになる。一陌という集合が一枚の銭の如く見なされ、その実質の価値が問題にされていることに注目した
い。また「東銭」「西銭」「長銭」「九陌銭」という表現も一陌が一枚の銭の如く認識された結果であり、宋代と同
様である。六朝の短陌研究史で、往々にして陌という集合でなく一枚一枚の銭の価値変動と短陌の発生を結びつけ
て考える傾向があるのは、修正しなければならない。

宋代の短陌と異なる点は、短陌の値の違いが業種別でなく地域的な差異であることである。しかしこのことは、
同一地域で異なる陌値が用いられることを排除しない。前述のように梁末の十年間に急速に陌の値は小さくなつた
が、全ての貨幣行使の場面で一斉に陌の値が変化することなど当然ありえず、もつとも一般的な陌値の周辺に異な
る値を伴いつつ、漸次に減少したはずである。

晋の事例に、

人の長銭を取り、人に短陌を還す。（葛洪『抱朴子』内篇六 微旨）

とあるのは、おそらく同一地域内に異なる陌が同時存在することを利用した行為である。この『抱朴子』の記述は、
銅銭に関するもので「長銭」と「短陌」の実質が異なっても名目一陌銭が等しいからこそ成立する行為である。ま
た劉宋の事例に、

荊州に在り、所在に哀刻し、多く財貨を営む。短銭一百を以て民に賦し、田登れば、就いて白米一斛を求む。

（『宋書』卷七十二、晋平刺王休祐伝）

とあるのは短銭と白米の交換であるが、短銭一百とわざわざ言うのは、短銭でない長銭一百が存在するからであろ

う。¹⁴

六朝社会に見られる短陌と足陌の換算の方法は残念ながら判明しない。宋代では第一の省陌と、第二・第三の短陌では換算の方法が異なっていた。宋代の第三の短陌と同様とすると、陌値を位取りの数として換算した可能性もあるが残念ながら確認できない。

ところで北周（五五六―八一）の甄鸞の著作である『五曹算経』巻五、金曹に次のような例題がある。¹⁵

今錢二百三十八貫五百七十三文足有り。九十二陌と為さんと欲す。問う、幾何を得んや、と。答に曰く、二百五十九貫三百一十八文、奇足錢四分四釐。術に曰く、錢二百三十八貫五百七十三文足を列ね、九十二を以て之を除せば即ち得。

この書の巻五金曹は具体的な財政上の例題を集めた部分である。それゆえ、この例題は會計上足陌と九十二陌の換算を行う必要のあったことを示している。つまりこの例題は北周財政に短陌計算があり、しかも九十二陌を比例定数として計算することを明示する貴重な資料である（但し所伝の数値に少し誤りがあり、計算結果と解答は正確には一致しない。正しくは二五九三一八・四七八二……であるから四分四釐でなく四分八釐。奇足錢とは端数のことであろう）。これは国家財政が用いる短陌という意味で宋代の第一の短陌である省陌に相当する。

ここで宋代の省陌が成立するまでの唐五代の財政上の短陌政策史を簡単に振り返っておこう。国家財政が使用する短陌は、唐の最末期に現れ五代に継承された。それ以前、唐朝は財政上で短陌を使用せず足陌を堅持した。唐末五代における国家が用いる短陌は、社会の多様な短陌使用を公認していない点と、必ずしも財政上ただ一つの短陌に統一しなかった点で、宋朝の省陌とは内容が異なっていた。宋朝の省陌は七七陌という統一短陌であること（とくに財政運用の必要から七七以外の値が用いられたことはある）、および社会における様々な短陌使用の公認を伴っていたことが特徴である。

では北周の財政上の短陌が、唐末五代もしくは宋代の財政上の短陌のどちらに近いだろうか。他に徴すべき資料がなく憶測にすぎないが、宋代の省陌は貨幣を媒介とした大規模な財政的物流を編成するための方法の一つであると考えるので、北周財政の短陌はそのような機能を十分果たしていない唐末五代における財政上の短陌に近いものと見なしてよいと思う。しかしまた北周が社会の多様な短陌の存在を認め、財政上にも導入しただけのことである可能性も否定できない。ただ確実に言えることは、財政上の短陌が採用される背景には、民間に自生的な短陌慣行が普遍化しているはずであることである。北朝の短陌の事例は管見の限りこれしかないが、南朝と同様に社会の貨幣使用の場においても短陌慣行のあったことが推定できるのである。

このように北周は社会で広まった短陌慣行に対応して財政上にもそれを導入したと思われるが、一般に国家がいつも社会にあわせて短陌を導入するとは限らず、逆に国家が社会に足陌を強制することもある。先述したように南北朝の梁では中大同元年、足陌の使用を社会に指令した。北朝では、東魏の武定六年（五四八）、文襄王（高澄）は、錢重が五銖あるものだけの入市を認めるにあたって、京師二市・全国の州鎮郡県の市門に各おの二つの称（秤）を置いて一〇〇錢分の重量一斤四兩二〇銖（すなわち五〇〇銖）を計量させた。^⑩ここでは正しく一〇〇枚の錢が錢貫でまとめられていたはずである。なぜなら、錢貫でまとめられていないバラバラの錢を市門で計量したとすれば、市門の通過後軽小な錢を選んで使用することを防ぐことはできないから、組替えを防止するため錢貫が用いられたはずであり、またもし一つの錢貫が数百枚・一千枚を連ねたとすると、市門で一〇〇枚ずつにまとめ直さねばならなくなり、その手間は大変なものだからである。つまり一〇〇枚の錢の重量の確認は、足陌の強制でもあったと考えられる。なお唐宋時代、国家が錢重を定め計量するときは、一〇〇〇錢が基準である。唐宋の錢貫（緡）は一陌ごとに結び目のある一〇陌だからである。^⑪

付言すると、短陌に関する記事はこのち八世紀末まで現れない（『旧唐書』卷四八、食貨志、元和四年閏三月

条中貞元九年三月二十六日勅）。それは隋・唐前半期における資料の欠如でなく、短陌の歴史の断絶であると私は考える。隋唐統一政権のもと、民間の恣意的な用钱方法は駆逐された。しかし中唐以後、中国の貨幣経済が新しい段階に移行し始めると再び発生するのである。新たに発生した短陌は、単に地域的な差異でなく、業種ごとに行市が主体となつて定める短陌であつた。

二 文・陌・貫の成立

古来、鑄造貨幣は「錢」で数えられ、ある一定のまとまりを数える単位は存在しなかつた。短陌が発生するには、陌の単位の成立していることが必要條件である。そこで、ここでは貨幣単位の問題を検討したい。貨幣単位としての文・貫の成立時期について、彭信威氏が『晋書』や『水経注』から文の用例を、『魏書』から貫の用例を挙げ、晋南北朝の時代であると述べて以後、それが定着したように思われる。⁽¹⁸⁾ 彭氏は注意深く比較的長い時間をとつて文・貫の成立時期を考えているが、私はもう少し限定できるのではないかと思う。

まず「文」から。魏晋南北朝時代の文の用例は『晋書』『魏書』等の正史をはじめ、『搜神記』『水経注』等にあまり多くはないが見出せる。一般にこの時代に関する書物では、価格ないし錢貨の枚数を表示するとき、「若干文」より「若干錢」「錢若干」の形式の方がはるかに多い。また逸文が伝えられる諸家の旧晋書に文の用例を見ることはできず、⁽¹⁹⁾ さらに同じ記事が他書に見られる場合、しばしば文でなく錢としたり、「錢若干」の表記方法をとる。⁽²⁰⁾ やや文の用例が多いのは『齊民要術』（四部叢刊所収南宋刊本を使用）である。二例挙げる。

・三十畝六万四千八百根。①根直八錢、合收錢五十一万八千四百文。百樹得柴一載、合柴六百四十八載。②載直錢一百文、柴合收錢六万四千八百文。都合收錢五十八万三千二百文。（卷五、種槐・柳・楸・梓・梧・柞第五

・③朱公曰……所餘皆貨、得錢五百一十五萬錢。(卷六、養魚第六十一)

①は単価が錢、合計が文の例、②は単価・合計いずれも文の例、③は合計が錢の例であり、形式が統一されていない。③は范蠡に仮託された成立年代未詳の書の引用であるが、①②は賈思勰自身の文章である。『齊民要術』は東魏(五三四―五〇)の初めに成立し、時代を異にする諸種の農書を引用するほか、現存の版本の問題も大きい。しかし①②のような形式の不統一は、全てが版本の問題とは思われないから、成書の段階から存在したと見てよいだろう。つまり六世紀のなかば、文は貨幣単位としてかなり用いられるようになってはいたが、まだ確定していない状況にあると思われる。

なお後人の手で編纂されたり、後人の手が加わった可能性のある文献資料を離れて、確実な文の同時代資料を探すと、管見の限りでは、南朝では齊の永明三年(四八五)の買地券²¹⁾、北朝では北魏の建明二年(五三一)の敦煌文書が古そうである。文は晋代に出現した可能性はもちろんあるけれども、ある程度普及したのは六世紀であろう。

文とは、錢貨の表の面を意味することもあるが、本来は文様・文字であつて貨幣価値を表現せず、錢貨に用いられるときはただその数だけを示す。この点では魏晉南北朝時代にしばしば出現する「枚」と同じである。²⁴⁾ただ枚があらゆる物に使用可能な量詞であるのに対し、文は錢貨に特定される点が違っている。貨幣単位としての文の成立は、後述のように大小の錢が混在して行使され、錢の重量を連想させずに純粹に枚数だけを数えた事態に対応している。

ところで魏晉南北朝時代は史上始めて年号錢が登場した時代でもある。すなわち漢興錢が登場したのは成漢の漢興年間(三三八―四三)²⁵⁾であり、以後北朝では太和五銖錢・永安五銖錢(北魏)、南朝では孝建四銖錢・永光錢・景和錢(劉宋)の年号錢が現れた。また三国時代ごろから有意の文言を鑄出したものも次第に増えてくる。鑄造者と時代に異説のある定平一百錢・太平百錢は王朝が鑄造したと確定できないが、豐貨錢(後趙、三一九年発行)・

常平五銖錢（北齊）、五行大布錢・永通万国錢（北周）、太貨六銖錢（陳）などは王朝が発行したものである。

年号錢・有意の文言を鑄出した錢の出現は実は貨幣単位である文の成立と、結局は同じ意義を有していると思われる。北魏末、錢の劣悪化に対処するための方策を提案した高恭之（道穆）の上奏の一節に、

宜しく大錢に改鑄し、文に年号を載せ、以て其の始めを記すべし。（『魏書』卷七七、高崇伝、註（82）に原文引用）

とある。これは政府が大錢を発行して通貨の劣悪化を改善すべきであり、その際基準の重量を満たした好錢であることを保証する文言として年号を記す必要があるとする意見である。⁽²⁶⁾五銖錢に代表される重量表示を有する貨幣は、現実には重量が錢文通りでない計數貨幣であるにもかかわらず、それでも実際の重量と錢文が一致するのを理想とした漢五銖の伝統を継承している。ところがここで主張されているのは、標準の官錢であることを保証するものとして皇帝の統治の象徴である年号が必要だというのである。北魏の太和五銖錢・永安五銖錢はまだ年号のほか、五銖の錢文をとどめているが、南朝の最初の年号錢、孝建四銖錢になると、当初鑄出された四銖の文字が、後に消滅してただ孝建となってしまう。⁽²⁷⁾このち隋はまた年号なしの五銖錢を発行するというように、中国の錢貨から重量表示が完全に消滅するのは開元通寶錢（六二一年発行）を待たねばならないが、漢興錢・豐貨錢以後開元通寶錢まで三〇〇年をかけ、年号や有意の文言など皇帝の治世と関係する貨幣名称が増加したのは、五銖錢の伝統からの脱皮の過程であり、中国の錢貨が計數貨幣として純化・抽象化の過程を歩んだことを示している。

次に「貫」について。本来、貫とは錢貫すなわち携帯の便のため錢を束ねる用具で糸貫と木貫があった。⁽²⁸⁾錢貫を含めた貫の用例は唐より以前は意外に少なく、貨幣単位として確実な貫の用例となると、いっそう少ない。前漢の「貫朽而不可校」（『史記』平準書）という場合の貫はもちろん錢貫であるが、ある定まった内容があったはずである。しかし、いったい幾ばくの錢が錢貫にまとめられたのか明白でない。一貫が一〇〇〇錢であるというのは、

『漢書』武帝紀（卷六）の「算緡錢」に後漢ないし曹魏の李斐⁽²⁹⁾が注して、「緡糸也、以貫錢也。一貫千錢、出算二十也。」というのがあるが、この場合の貫は一〇〇〇錢であると言うにすぎない。そもそも李斐が注したのは一般に貫の内容が自明でないからである。漢代に貨幣単位としての貫があるなら高額を表示するとき使われてもよさうであるが、実際に文献に現れるのは「万」「万万」である。むしろ漢代では文帝期の賈誼の上奏にあるように、一〇〇枚の錢の重量が問題にされ、一〇〇が基準となっている。⁽³⁰⁾言うまでもなく「万」「万万」は千でなく百の二乗、四乗の数であり、百と密接な関係がある。いずれにしても両漢では貨幣単位としての貫は成立せず、⁽³¹⁾また一つの錢貫が一般に一〇〇〇錢をまとめたものとは言えない。⁽³²⁾

では魏晉南北朝ではどうか。錢貫でなく貨幣単位としての貫の資料はやはり極めて少ない。しかし南朝では梁の鉄錢について、

交易する者、車を以て錢を載せ、復た計数を計らず、而して唯だ貫を論ず。（『隋書』卷二四、食貨志）

というのは、一枚一枚数える手間をはぶき、貫を数えるのであるから貫に一定の内容がなければならず、北朝では北魏の「錢一万貫を賜う。」（『魏書』卷九一、徐謖伝、太和二十二年（四九八）のこと）の例も、おそらく一定の内容をもつであろう。用例は多くないが、南では梁、北では北魏のとき貫は貨幣単位として成立している。貨幣単位である貫の成立の時期に関しては、

北魏の任城王澄が、熙平初め（五一六）の上奏で、

錢の用を為すや、貫緡相い属し、斗斛の器を仮らず、秤尺の平を勞せず。濟世の宜、深允為りと謂う。（『魏書』卷一一〇、食貨志、註（81）に原文引用）

と言うのが注目に値する。これは決まった内容のある錢貫の機能を明言したものである。このようなことが改めて述べられることに着目すれば、北朝における貨幣単位としての貫の成立は、この上奏の時点をあまりさかのぼらな

いことが予想される。前引の太和二十二年の例があることからすると、北朝では五世紀末と認めてよいだろう。

南朝の梁の鉄銭の例は六世紀前半のものであり、どれだけ遡れるか不明だが、これ以前の資料に貨幣単位としての貫の用例が見出せない以上、やはり南朝と北朝であまり大きな違いはないと見なさざるを得ない。とすれば、中国史上、貨幣単位としての貫の成立は五世紀末と見なして大過ないと考ええる。貫は、文より上位の単位であり、銭数を数えたり、価格を計算するとき、表示する数値が小さくなるという利便がある。しかし利便のため成立するというなら、もっと早い時期に成立してもよきそうであり、五世紀末に成立するには別の要因があったはずである。ではその要因とは何か。

北魏は建国（三八六）一〇九年後、華北の統一を実現（四三九）してから数えても五六年後の太和十九年（四九五）初めて太和五銖銭を鑄造発行した。⁽³³⁾ それまで一世紀以上にわたって北魏は銭貨を媒介とした財政運用は行っておらず、太和五銖の発行は幣制の制定でもあった。とすればこのとき貨幣単位が導入された可能性が高いように私には思われる。一方、梁の事情は異なる。梁における貫の成立は鉄銭の信用の低下にともなうて発生した事態であった。劣悪銭が大量に混在する大小銭のまとまった使用、鉄銭による物価騰貴という事情の一般化が文より上位の単位を要請したのであり、おそらく自然発生的に生じたものである。

最後に「陌」について。東晋の資料に⁽³⁴⁾、

臣に正陌三万銭・五足の布有り。以て此の牛を買わんことを乞う。（『太平御覧』卷八二八、資産部、売買、劉超讓表）

というのがある。貫がまだ単位として成立していない時代のことである。「正陌三万銭」とは正しく一〇〇枚で一つの銭貫にまとめられた銭で合計三万銭のことである。ここでは価値を表す貨幣単位としては銭が使われており、陌は一〇〇枚の集合そのものを指している。このほか晋ではほぼ同時期と思われる前掲『抱朴子』に見える「長銭

・短陌」は、錢貫で括られた枚数は異なるが、基準は一〇〇錢にあることを明らかに示している。また先に引用した『宋書』卷七二、晋平刺王休祐伝の「短錢二百」とは、短陌で一〇〇錢、すなわち實際の錢数は不明だが、名目一陌錢が一つの錢貫であることは確実である。さらに梁では一〇〇枚ごとの重量を一斤二兩と定めたことがある。⁽³⁵⁾一〇〇枚の計量は一本の錢貫が使われたはずである。このように資料で確認できるところでは晋代には一〇〇枚が一つの集合として錢貫にまとめられ、以後の南朝でも同様であつた。一方、北方の事例では、一〇〇枚の集合を示す資料は見当たらず、前述した東魏武定六年（五四八）、入市に際し一〇〇錢分を計量させた事例が最初である。時期に注目すると貨幣單位の貫が成立したのちのことである。

一〇〇枚の集合としての陌、及び貨幣の価値量を表示する陌の成立がいつまで遡れるかという問題は難しいが、ある程度の推測は可能である。前漢文帝のころ賈誼の上奏文に一〇〇錢のまとまった計量がなされたことが見えることから、そのころ一〇〇錢の集合が錢貫に括られていたと思われるが、少なくとも短陌はその時点では未成立であるから、価値の單位としての陌も未成立であろう。⁽³⁶⁾秦漢三国の文献を調べると、陌字を使って錢のまとまりを表現した用例を見出すことはできず、初出が晋代になるのも、それ以前に陌が單位として成立していないことを示しているのであろう。

以上のように、挙例は乏しいけれども、おそらく漢代以来一〇〇枚ないし一〇〇枚以内の錢がまとめられて使用されることがあり、晋以後一般化し南朝でも同様であることが確認できる。錢貫で一〇〇枚以内の錢をまとめ、その集合を一つの貨幣と見なして行使すると短陌が成立する。しかしここで問題が起きる。南朝で貫より以前に陌が貨幣單位として成立し、しかも陌が錢貫と密接な関係があり、一つの錢貫が一陌というのが本来の形であるなら、貨幣單位である貫と陌の関係はどうなるであろうか。

秦漢時代、一つの錢貫が一〇〇〇枚の錢を内容とするのは一般的でなかつたことは前述した。むしろ一〇〇枚を

まとめていると理解できる記事の方が多い。また出土資料を見ると、現在のところ魏晉南北朝時代に一〇〇〇枚の錢が一本の紐に通された例は発見されていないようであり、一〇〇枚ごとに結び目のある四〇〇錢のまとまりが五つ発見された例はあるものの、一つの錢貫の内容が報告されているものは一〇〇枚以内である³⁸。私は一つの錢貫が一陌であると同時に、一つの錢貫に由来して、そのまとまりを一貫とも称するようになった、つまり陌と貫とは当初、貨幣単位としては何れも一〇〇枚の錢を表すものとして成立したと見るのが自然ではないかと思う³⁹。

しかしこれは南朝のことである。北朝では六世紀に、貨幣単位としての貫の内容が具体的に分かる資料が突然出現する。

歲出万束、一束三文、則三十貫。〔齊民要術〕卷五、種榆・白楊第四十六

とある一貫は一〇〇〇文である。また前章で紹介した『五曹算經』卷五、金曹の例題もそうである（この書の他の例題もやはり一貫は一〇〇〇文である）。このような一貫＝一〇〇〇文の例をそれ以前の北朝で私はまだ見つけていない。

では一貫が一〇〇〇錢であることを明示する『齊民要術』『五曹算經』の成書時期と、一〇〇〇錢の重量を市門で計量させた東魏の武定六年とは、時期が近接していることはどのように理解すればよいのだろうか。私の想定では北魏太和十九年（四九五）の幣制導入の時点で、一〇〇枚を一つの錢貫にまとめると同時に、一〇〇〇錢の価値を表示する単位として貫を制定した、つまり実際の錢の括り方としての錢貫とは違う抽象的な貨幣単位として、錢貫一〇本分に相当する一〇〇〇錢を意味する貫が成立したと考える。やがて民間では短陌が発生したが、それに対し東魏は足陌を強制し、北周では民間の短陌使用に対応して財政上にも導入したのである。そしてその後、おそらく隋初に財政上錢貫でまとめられる錢の集合（緡錢）が一〇〇〇錢でなく一〇〇〇錢に変更され、それが社会にも広がつた結果、緡錢の形状に規定されて、貫・文が直接表面にでる単位となり、一方で陌は内部で実質的に貫の内容を

規定しながら表面に出ない単位になったと推測する⁽⁴⁰⁾。

これに対し、南朝では一貫 \equiv 一〇〇〇銭を示す例は隋以前に一つも見当たらない⁽⁴¹⁾。南朝では陳が隋に滅ぼされ隋の財政制度が適用されるまで、自然発生した一銭貫 \equiv 一陌 \equiv 一貫 \equiv 一〇〇銭がそのまま継承されたのではないだろうか。

三 魏晉南北朝の貨幣事情

次に魏晉南北朝時代の短陌、貨幣単位である貫・文の成立という現象を当時の貨幣事情のなかに置いてみよう。当時の貨幣事情について簡単に総括すると、実物貨幣を含む貨幣の地域的分裂、錢貨の劣悪化・小錢化の進行、民間の鑄造を許可することがあるような国家の造幣大権の未確立とまとめることができる。これらの事情はこれまで多くのことが語られ、共通の認識となっていることも多いが、詳細に見ると、事実認識に関して必ずしも一致していない部分が多くある。本章では、以上の点に留意しつつ、魏晉南北朝の貨幣事情に関する私見を、論旨の展開に必要な限りで述べたい。

魏晉南北朝の貨幣事情が後漢時代に胚胎することは周知のことであるが、地域によって異なる貨幣が用いられたことについては、三国時代に各国が独自の貨幣政策を実施したという歴史的條件が大きく作用している。曹魏は一時実物貨幣を採用したことはあるものの、五銖錢を鑄造して漢代以来の伝統を継承した。一九八七年河南省許昌県で発見された総重量三三五kgに及ぶ銅錢はうち四〇kg（合計三二六〇九枚）が整理された⁽⁴²⁾。一枚平均一・二g（二銖弱）である。整理の結果は大部分が後漢晚期およびそのやや後の銅錢からなる。その内訳で特徴的なことは、魏五銖と認められるものが三五〇枚（一・一％）含まれ曹魏の五銖錢鑄造が確認できること、剪輪対文五銖一四〇〇〇枚（四二・九％）・縋環五銖三八〇〇枚（一一・七％）の変造錢が含まれること（計五四・六％）、無文小錢一一

三一〇枚(三四・七%)が含まれることである。曹魏において官鑄の五銖錢がごくわずかであるのに対し、變造錢と無文小錢を合わせると八九・三%に及び劣惡錢普及の実態が窺えると同時に、無文字錢の多さに注目すれば、方孔円形という伝統的な形さえ備えていれば、民間で錢貨として十分に通用したことが窺える。無文字錢は言うまでもなく、社会が自ら生み出した錢である。なお蜀漢・孫吳の錢は計一九枚にすぎない。

孫吳は、一時「大泉五百」「大泉当千」という大錢を發行したことが知られ、このほか記録にはないけれども呉錢と認定しうるものとして「大泉二千」「大泉五千」がある。⁽⁴⁴⁾大錢の特徴は、泉字を使う点と額面の大ききの点から王莽の制度を繼承したこと、重量比と額面比が一致しない、つまり含有の銅の素材価値と大きくかけ離れた錢貨であること、初鑄の規格は維持されず小型化したことである。ただし、この種の大錢は市場にはあまり出回らなかったらしい。⁽⁴⁵⁾

呉錢の出土状況を整理した劉建国・高鳳両氏によると、呉墓一八座のうち、漢錢のみ出土する墓は七座(三九%)、漢錢と三国錢を同時に出土し、かつ漢錢が圧倒的に多い墓は九座(五〇%)、三国錢のみ出土する墓は二座(一一%)であり、相当数の剪輪錢⁽⁴⁶⁾・縵環錢を含む漢五銖が圧倒的に多い(九〇%)⁽⁴⁷⁾。漢五銖がもつとも一般的な通貨であり、田租納入も漢五銖が要求されたと思われる。⁽⁴⁸⁾大泉五百等の大錢は、五銖錢を基準とした額面であるはずである。

蜀漢は確實なところでは五銖錢のほか「直百五銖」「直百」「直一」を發行した。「直百五銖」は最大でも蜀五銖の三倍程度の重量で値は一〇〇倍であり、⁽⁴⁹⁾孫吳の大錢と同様、素材価値と関係しない貨幣である。「直百」になると、錢重は重くても四銖しかなく、五銖の文字も消滅する。⁽⁵⁰⁾この変化は五銖錢の繼承から訣別する過程が表現されたものと評価できる。出土状況を見ると、前漢以来の貨幣を含むが、魏錢・呉錢は殆ど存在しないようである。⁽⁵¹⁾

要するに、三国時代、各国の錢貨發行の状況は異なり、呉蜀では一〇〇錢以上の額面をもつ大錢を含め独自の錢

貨を発行した。これらの大錢が他国の領域に流入したとき、どのように用いられたかは不明である。しかし本国の額面通りに通用することはないだろう。いずれにしても、三国鼎立が貨幣体系の分裂を生み出し、晋以後の貨幣の地域的分裂の歴史的条件となつたことは疑いない。出土錢によると、いずれの地域でも漢五銖、それも變造錢が非常に多いから、この点から見ると、五銖錢およびその變造錢が中国全土を通して共通の通貨であり、三国間の決済手段となつた可能性が高い。三国間の錢貨の移動・貿易關係は、この事情を勘案して考察する必要がある。

晋では貨幣を発行したとする資料は存在せず、前代の錢貨が流通した。西晋が統一王朝であつたから、三国時代のような貨幣の地域的分裂状況は少し緩和され、前漢以来の貨幣と三国各国の貨幣が混ざり合つて同時に通用する地域が拡大した。しかし地域的差異の解消にはほど遠いのが実情である。出土錢を見ると、数は少ないが全国各地から蜀錢が発見されるほか、漢錢のみ出土する晋墓、三国錢のみ出土する晋墓がある。⁽⁵²⁾

東晋では、孫呉の旧錢が軽重雜行し、これらの錢は本来の貨幣名稱でなく大まかな大小によつて比輪、四文とよばれた。⁽⁵⁴⁾一般に晋墓からの出土錢は非常に少なく、錢貨の流通量と対応しているかも知れない。しかし、錢を廃して穀帛を用いよという桓玄の提案が実施されなかつたのは、⁽⁵⁵⁾錢貨が流通量は十分ではないにしても、一定程度流通していたからであろう。

私鑄錢・變造錢が多いことは魏晋南北朝時代を通じる特徴である。南朝に関して、安田二郎氏は六朝初期、剪輪五銖は三〇％に達しなかつたが、東晋では二倍以上の六〇〜六五％を占め、さらに五世紀後半には九〇％以上に達したと概算する。⁽⁵⁶⁾歴代の大小多様な錢・私鑄錢・變造錢が、社会では区別されずに使用されたらしく、大小混雜した錢が錢貫のあとを留め串をなした状態で出土した例もある。安田氏の指摘するように、錢の大小は貨幣価値に係しないと言ふべきである。⁽⁵⁷⁾

このように私鑄錢・變造錢の使用が時代を下るにつれて一層激しさをますと、国家はしばしば社会で通用する小

錢よりも大型の錢貨を発行し交換比を定めた。劉宋では元嘉七年（四三〇）重量四銖の四銖錢を発行し、二十四年（四四七）重量八銖の五銖錢を鑄造、先の四銖錢とあわせこれらの大錢を当兩とした。⁽⁵⁸⁾それは、この大錢が小錢と等価で通用し、剪鑿を免れなかったからである。しかし大小の錢を区別しようとするこの政策は成功せず、翌年公私ともに不便との理由で大錢当兩は停止された。⁽⁵⁹⁾むしろ社会における小錢化の趨勢にならい、永光元年（四六五）に至ると宋朝自身、重量二銖の二銖錢と景和錢という小錢を続けさまに鑄造発行するとともに、百姓の鑄錢を許した。⁽⁶⁰⁾私鑄の公認は、小錢化をいっそう激しくしたので、翌泰始二年（四六六）景和二銖錢を廃止すると同時に、鵝眼錢・縹環錢といった劣悪な錢も禁止し、さらに私鑄も禁じた。⁽⁶¹⁾なお以上のように宋朝の貨幣政策が展開した時期において実物貨幣が専ら用いられた地域もあることに一応注意しておこう。⁽⁶²⁾

蕭梁は建国後まもなく形制を異にする二種類の五銖錢（五銖錢と公式女錢）を発行し、さらに民間の私鑄を許すとともに、それを国庫の古錢すなわち好錢と一・二対一の比価で交換し、民間での比率もこれに準じるとした。⁽⁶³⁾これは好錢と悪錢が等価で通用する事態に対し、秩序を与えるための政策であるが、おそらく効果はなかったものと思われる。普通四年（五二三）、各種の鉄錢を発行し、侯景の乱後（五五二）に当十の兩柱錢（錢文五銖の銅錢）を、滅亡直前の太平二年（五五七）に当二十の四柱錢（錢文五銖の銅錢）を発行した。四柱錢はまもなく兩柱錢と同じ当十に改められたが、それは四柱錢と兩柱錢は錢文・大きさ・重量が殆ど同じで、単に裏面の記号の有無の違いしかなかったからである。しかし民間ではそのような差異どころか、輕小の銅錢（鵝眼錢）との区別さえ認めず、等価で使用した。⁽⁶⁴⁾一方鉄錢は、国家財政では銅錢と等価であつたはずであるが、民間では相場を下げ、⁽⁶⁵⁾梁朝の滅亡とともに流通しなくなった。⁽⁶⁶⁾このように銅錢が大小ともに等価で通用し、鉄錢と銅錢との間に相場が立ったというのは、国家の貨幣政策による貨幣価値設定の規定性が弱まったことを意味し、さらに王朝の交代とともに鉄錢が通用しなくなったというのは国庫通用力の喪失のためと考えられる。

なお梁初の通貨事情について、京師・三呉・荊・郢・江・湘・益は錢、交・広は金銀、その他は実物貨幣が用いられ、銅錢が流通した地域でも重量八銖の五銖錢は三呉の属県で、女錢は全国の郡県で、重量三銖半の五朱錢は三呉で通用し、このほかにまた太平百錢・定平一百・稚錢五銖・対文錢・豐貨錢・布泉錢もあつたという。⁽²⁾ 各種の銅錢と実物貨幣、さらに金銀が地域的比重の差異をともなつて流通したさまが窺える。

陳朝は前述の大小錢（兩柱錢と鵝眼錢）が等価で通用する状況を改めるべく五銖錢を鑄造して鵝眼錢に対して当十とし、さらに大貨六銖を發行して五銖錢に対して当十とした。しかしのち五銖錢と等価としたばかりか、大貨六銖を廃止せざるをえなくなつた。⁽³⁾

このように南朝の諸王朝自身が様々な錢貨を發行し、しかも時には私鑄を許した結果、錢の種類はますます多くなり、社会では輕小劣惡の錢が増加した。国家が基準の五銖錢を發行したり、大錢を鑄造して比価を定め、大小錢に秩序を与える政策は悉く失敗に終わった。国家による価値設定はほとんど機能しなかつた。

ところで南齊の永明二年（四八四）、同四年の記事に、江東で剪鑿錢が広範に行使され輪郭完全な大錢は十に一つもない状況であるのに、国庫に通用する銅錢は円大なものに限られ、納税者は円大な錢一枚を獲得するためにおよそ二枚の小錢を必要としたという。⁽⁴⁾ これは国庫通用力を有する円大な錢と社会で広範に使用される小錢の間には自ずから相場が立つたことを意味する。そうすると前述した大小の錢が社会では等価で通用する事態と全く矛盾する。このことはどのように解釈すればよいのだろうか。永明二・四年といえは、南齊がまだ錢を鑄造していない時期であり、流通する錢貨は前代の劉宋までの旧錢である。劉宋は前述のように景和二銖錢を發行したり、私鑄を公認したこともあつたように、納税に完全な五銖錢のような大きな錢のみを要求したはずはない。また南齊が鑄錢に踏み切つたのは永明八年四川でのことで、一千餘万錢の鑄造ののち停止されたとある。⁽⁵⁾ 南齊はむしろ鑄錢には消極的であるといえ、大錢の供給なしに大錢を要求するという政策もかなり不自然である。私は、納税に大錢しか通用

しないというのは、南斉の江東だけの特殊な事柄であつたのではないかと思う。ただ国家権力の強制が実効力を備へたとき、社会では一時的にもせよ、大小銭が等価でなく、財政に規定された相場を形成したと考えたい。⁷⁶⁾

次に北朝の貨幣状況はどうか。北魏が銅銭を発行したのは建国後一〇〇年以上経過した太和十九年（四九五年）のことであつた。⁷⁷⁾ しかも北魏以前、西晋では錢貨を鑄造せず、五胡十六国時代も錢貨鑄造は二、三の王朝を除くと知られていない。⁷⁸⁾ それゆゑ社会で流通する錢貨と言へば、漢代以来の完全な旧銭は減少して剪輪等の変造銭が増加し、前述の曹魏時代の窖藏銭を想起すると無文字銭もかなり存在したはず、というよりもいつそう無文字銭の比率が増大していたと思われる。このような状況下で発行した太和五銖が「錢貨周流する所無し」（『魏書』卷一一〇、食貨志）という状況を解決できなかったのも当然である。太和五銖は京師では通用したが、徐揚では流通しなかつた。各地に土貨（土銭）があり、荊郢と兗豫は通貨上対立した。続けて永平三年（五一〇年）五銖銭を発行した。しかしこの新銭も流通せず、ただ古銭だけが通用する地域があり、律で禁止される「不行の錢」すなわち鶏眼錢・鑕鑿錢が河南では制限を受けず、河北では新銭がないだけでなく、旧来の錢が禁止されたため糸布が用いられるというありさまであつた。⁷⁹⁾

土貨（土銭）とはある一定の範囲内のみで通用する地域独自の通貨であり、各々が一見して区別しうる材質・大きさの違いを伴なつていたはずである。どのような錢が土貨（土銭）と言われたのか明文はないが、私は無文字銭もそれに含まれると推測する。本来半両銭以来中国の銅銭は計數貨幣であり、錢貨としての信認の根拠は国庫通用性、とりわけ納税手段たることにある。⁸⁰⁾ しかし北魏では錢納を要する税は殆どなかった。このように国家的支払手段としての機能が薄弱な貨幣の機能は、社会内部における流通の媒介物であり、流通の媒介物として地域的な合意のあるものなら、たとえ切り刻んだ布帛であつてもよかつた。無文字銭は尺寸の布帛よりも貨幣らしい形態を備へていたに過ぎない。社会で流通するこのような貨幣に対し国家は十分統制することはできない。河北では禁断でき

たようであるが、河南では放置せざるを得なかった。任城王澄は鸚鵡・鑲鑿といった完整な銭の変造と分截による布帛の使用価値の喪失を問題とし禁圧を提言したが、一旦は旧来どおりとされた。⁽⁸¹⁾土貨（土銭）もそのまま放任されたのであろう。その後民間では私鑄がいつそう激しくなり、銭の劣悪化も進行した。北魏は盗鑄を禁じたり、額面と重量が一致する永安五銖を発行して銭貨の統一を図ろうとし、さらに銭絹比価を通じて官銭の価値を高めようとしたが、⁽⁸²⁾効果のあがらないまま間もなく滅んだ。

ところで任城王澄の上奏文に、大小様々な銭貨が流通するところでは、貴賤の差があり、自から郷価が形成されたという。⁽⁸³⁾これは大小さまざまな銭貨の価値が重量に規定された結果、地域ごとに異なる通貨の比価が形成されたというのではない。前章で紹介したように任城王澄の別の上奏文に銭貨の一定のまとまり即ち貫の効能が記されており、銭貨の価値尺度機能が金属重量に基づくのではなく、あくまで計数にあることが確認できるからである。郷価は地域ごとに異種類銭貨が通用すると見なされた結果、形成された比価であり、地域ごとに異なる通貨体系が形成されたことを示している。このような事態が発生したのは、地域によって貨幣政策が異ならざるを得なかったことに明らかなように、国家の正式の銭貨が領土全域にわたる画一的な基準とならない事態、換言すると国家が銭貨を通じて社会経済を規律できない状況と対応する現象である。

北魏のあとの四王朝の通貨事情も大きくは変わらない。東魏・北齊・北周の記録には、地方で多様な材質の独自の通貨が出回ったこと、このような土銭の劣悪化が進行したことが明確に残され、王朝の銭貨政策は、北周が特異な政策をとり当五・当十の大銭を鑄造したほかは、何れも銭文と重量の一致する五銖銭を発行して通貨の基準化を図ろうとしたことで共通する。⁽⁸⁵⁾

北朝の出土銭を一例見ておこう。安陽市出土の北朝末期の埋藏銭は、合計二八五枚、五九一一g、平均約二・〇gであった。その内訳は、前漢銭（四銖半兩・五銖）三四枚、王莽銭一七枚、後漢銭一五九七枚（その内、磨辺

五銖六六四枚・剪辺錢三三二枚）、三国錢七三枚、兩晉南北朝錢一一六一枚（その内、対文錢五七七枚・緹環錢一三三枚）である。貨幣の周囲を削ったり、切り取った磨辺、剪辺、対文錢が計一五六三枚あり、五四%を占める。これに対し緹環錢一三三枚は五%にすぎない⁽⁸⁶⁾。前出の丹徒県出土の東晉時代の例では、計一四〇kgのうち約九〇kgの剪輪錢が含まれるのに対し、緹環錢はわずか二〇餘枚であった。ここからいわれる緹環錢は盜鑄の原料になったという理解が生まれ、⁽⁸⁷⁾安田氏も賛意を表している。安陽市の出土例でも傾向は同じであるから、緹環錢はおおむね盜鑄の原料であつたと思われるが、五%が単に紛れ込んだものと言うには少し多いようである。また前述した許昌出土の曹魏の例では剪輪錢の方がはるかに多いという点と同様だが、緹環錢も一・七%あつた。私は緹環錢は盜鑄の原料であるという理解は賛成だが、時と場所によつては通貨として流通することもあつたと考えたい。

さて第一章で述べた晋南北朝時代の短陌の特徴が、以上の貨幣状況と酷似することは明らかである。長錢と短錢の取引が成立したように、名目一陌錢が内容を異にしても等価であることは大小多様な錢貨が等価であつたことと同じであり、短陌の地域的差異は貨幣流通の地域的相違と同じであり、陌の値がますます小さくなつたことは、錢が剪鑿されてますます小さくなつたことと同じであり、国家の足陌強制が功を奏さなかつたのは大錢の価値を維持できなかったことと同じである。私鑄錢・変造錢が一枚一枚の錢貨についての現象であるのに対し、短陌は陌を単位とする集合に現れた現象に過ぎないのである。

結 語

以上魏晋南北朝時代の通貨事情を検討した。通貨の地域的分裂、惡錢・小錢の大量流通、国家の造幣大権の未確立、年号錢の登場、短陌の出現、貨幣単位の成立等の貨幣現象は、華中南と華北で殆ど平行関係にあつた。これらの点から見れば、南北の貨幣經濟に質的な違いを見出すのは困難である。錢貨の鑄造発行について言えば、南方で

は孫呉ののち東西の晋を通じて発行されず、宋齊梁陳の四朝で発行された。北方では五胡十六国時代に、二、三の王朝が小規模ながら発行し、北魏時代は華北統一後長らく発行しない状態が続いたのち五世紀末に至って発行、東西魏・北周・北齊の四朝も発行した。つまり中国全域を眺めれば、官銭は北で発行したとき（五胡十六国）南で発行せず（東晋）、北で発行しなかったとき（北魏）南で発行した（南朝前半）という相反した状況が見られる。王朝のそれぞれの事情によつて発行状況は変化するのであり、常に一定量は必要とする社会的需要に対応して国家が官銭を供給したわけではない。

このように南北の通貨事情は共通する面があるが、異質な面もある。官銭の発行額について言えば、数字で比較することはできないけれども、南方の方が多いという印象は否めない。しかし北方では無文字銭をはじめ土銭が大量に流通した。これは国家の権威・財政政策とは無関係な銭貨であるだけに正史のような文献資料に現れにくいという事情がある。官銭の記述の多少によつて一概に南朝社会における銭貨流通量の相対的な多さを推し量り、さらに市場経済の比較的高度な展開を想定することもできない。

問題は通貨量の額にあるのではなく、南で官銭の記述が多く、北で少ないという意味にある。私の観点からすると以下のように解釈できる。すなわち北魏に見られる土銭や尺寸の布帛は国家の財政手段にならない以上、それは自生的な市場的流通にかかわるものである。これに対し、官銭は国家的物流も市場的流通もどちらの媒介物としても機能する。南北を比較して明白に異なるのは、南方の銭貨には市場的流通の媒介物としての機能のほか、納税や財政支出など国家の経済政策の媒介物としての機能が加わり、北方の銭貨では財政機能が希薄なことである。⁽⁸⁸⁾

南北朝前半、南朝では銭貨を国庫に集中しました社会に放出するという銭貨による財政運用が積極的に取り入れられたのに対し、北魏では国家と社会との間に銭貨の授受関係を築いて統治するといった方策をとらず、従つて民間では流通に必要な媒介物を自前で用意したという違いがあり、その結果、南の官銭に対する北の土銭・布帛という

対立が顕現した。

南北朝後半になると南北いずれも積極的に官錢を供給するようになった。北朝では北魏末に幣制を定め、官俸支給⁹⁰や納税⁹¹に見錢を導入した。しかし官錢の供給量が短期間に社会的必要量を満たすほど増大することは当然ありえず、黄河流域の経済先進地でも官錢が流通しない状況にあった。官錢供給以前の華北では土錢・布帛が市場的流通を担ったが、こうして官錢が供給され国家の財政運用において錢貨を手段とする局面が拡大すれば、やがて土錢や極端な劣悪錢は排斥され、官錢による統一が進行する。この過程は東西の魏・北周・北斉を通じて進行し、とくに南北を再統一した隋文帝のもとで強力に推進され、一定の成果をあげた。⁹²

錢貨を財政手段として相対的に多く取り入れた南朝においても、実物主義すなわち使用価値の取得と再分配を財政システムの基本とするという点では北魏と変わるところはない、というよりも中国前近代はどの時代も基本的には実物主義であり、王朝によってその徹底の度合いが異なるだけである。⁹³つまり南北の貨幣經濟を比較すると、南北朝末期を除いて、南朝の錢貨の方が租税納入等国家的支払手段としての機能が強固であると言えない。

註

魏晉南北朝時代の貨幣資料は正史のほか、『通典』『太平御覽』等と同じ内容の記事が多くあり、しかも往々字句の異同を伴っている。本稿では基本的に正史の記事を引用し、論旨に支障がなければいちいち他書の出典・字句の異同を記さない。

(1) 関係論文は多いが、基本的な考え方を提出した重要な論文をあげると、武仙卿氏は南北ともに貨幣經濟であると認めた上でなお、貨幣經濟がよく維持されたのは南方

であるとし、全漢昇氏は南北ともに自然經濟であると認めた上で南朝では比較的商業が発達したため錢幣が流通したとし、何茲全氏は漢代以来の交換經濟が北方（黄河流域）では自然經濟に逆転したのに対し、南方（長江流域）では継続的に発達したと認め、川勝義雄氏は南朝梁の貨幣經濟は唐前半期よりもずっと高い水準にあると推測した。

武仙卿『魏晉南北朝經濟史』（商務印書館、一九三七
年）。

全漢昇「中古自然經濟」(『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』一〇、一〇四八年)。

何茲全「東晉南朝の錢幣使用与錢幣問題」(『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』一四、一九四九年、『說史集』上海人民出版社、一九八二年、所収)。

川勝義雄「侯景の乱と南朝の貨幣經濟」(『東方學報』京都三二、一九六二年、『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年に「貨幣經濟の進展と侯景の乱」と改題して所収)。

(2) 宮澤「宋代中国の國家と經濟——財政・市場・貨幣——序論」『中国貨幣經濟論序說』(創文社、一九九八年)。

(3) 呂思勉「兩晉南北朝史 下」(開明書店、一九四八年)一〇三〇頁。

(4) 何茲全前註(1)論文。近年出版された東晉南朝の經濟通史はおおむね何氏の説を採用する。例えば、許輝・蔣福臣主編『六朝經濟史』(江蘇古籍出版社、一九九三年)三九一頁、邱敏執筆。劉靜夫『中國魏晉南北朝經濟史』(人民出版社、一九九四年)一九七頁。高敏主編『魏晉南北朝經濟史 下』(上海人民出版社、一九九六年)一〇二四頁、張旭華執筆。

(5) 彭信威『中國貨幣史(第三版)』(一九六五年、一九八八年重版、上海人民出版社)。梁については二六四頁。晋については二四八頁。また陳明光氏は梁の短陌について銅錢の価値上昇とする。『六朝財政史』(中國財政經濟出版社、一九九七年)二二二頁。

(6) 川勝前註(1)論文。著書で三六四・三六五、四〇〇・四〇一頁。

(7) 越智重明「梁の武帝と貨幣流通」(『魏晉南朝の人と社会』研文出版、一九八五年)三〇五・三〇九頁。

(8) 井上泰也「短陌慣行の再検討——唐末五代時期における貨幣使用の動向と國家——」(『立命館文學』四七五・四七七、一九八五年)。

(9) 安田二郎「東晉・南朝初期の通貨問題をめぐって」(『中國金融史の基礎的研究 昭和六二年度科學研究費補助金(一般研究B) 研究成果報告書』一九八八年)。

(10) 程民生・張瑞生「論宋代錢陌制」(『中國史研究』一九九六・三)。

(11) 宮澤前註(2)著書第二部第一章「唐宋時代の短陌と貨幣經濟的特質」。

(12) 孫吳の大泉五百・大泉當千、蜀漢の直百五銖・直百錢・定平一百は、一枚で少なくとも五銖錢一〇〇枚の額面を有する鑄貨である。これらの大錢は何れも銅錢であり、五銖錢と素材を等しくする。宋代では銅錢と鉄錢は、財政上等価に設定されても、素材が異なるため種類の違う貨幣とみなされ、異なる価値變動が見られた。もし大泉五百を始めとする大錢が五銖錢と異なる種類の貨幣(異なる価値体系をもつ貨幣)と見なされたならば、宋の会子のように短陌が発生する可能性がある。しかし今のところ資料の不足から確認できない。ただ短陌が発生した梁の時代には、銅錢鉄錢ともに少なくとも一〇〇錢の額

面をもつものは存在しない。

(13) 唐宋時代の短陌を二種類の貨幣の価値関係で捉える見

方に関する批判は、宮澤前註(2)著書三一三―三一五頁参照。これは唐宋の短陌についてのことであるが、論

理としては六朝の短陌にも当てはまる。ただし著書三一四頁で、宋代の銅銭と鉄銭の間に短陌が発生しないことを論理的には否定しなかった。それは今にして思えば不十分な記述であり、銅銭と鉄銭のレートとしての短陌が発生するためには社会的評価の低い鉄銭の側で少なくとも一〇〇文の額面が固定された大銭、すなわち鉄の当百銭が普及していることが必要条件である、と書くべきであった。要するに、銅銭に対し鉄銭を会子の位置に置かなければ、短陌は発生しないのである。宋代の鉄銭に当百以上の大銭が大量に発行された事実はないから、当然銅銭・鉄銭間に短陌は発生しない。

(14) このほか短陌の資料としては『南史』卷八、梁本紀の

初、武帝末年、都下用钱、每百皆除其九、謂為九佰、竟而有侯景之乱。及江陵将覆、每百復除六文、稱為六佰。識者以為九者陽九、六者百六、蓋符歷數、非人事也。

という記事が知られているが、私には「九佰」「六佰」が解釈できない。

(15) 『五曹算経』の現伝本には著者名が記されず、「唐朝議

大夫行太史令上輕車都尉臣李淳風等奉勅注釈」とだけあるが、現在北周の甄鸞の著であることが確認されている。

『中国歴代算学集成』(山東人民出版社、一九九四年)

の解題「『五曹算経』簡述」を参照。この書は「地方行政職員と軍隊職員のために編写された算術応用書」である。

(16) 『魏書』卷一〇、食貨志、

(武定)六年、文襄王以錢文五銖、名須称美、宜称錢一文重五銖者、聽入市用。計百錢重一斤四兩二十銖、自餘皆準此為數。其京邑二市・天下州鎮郡県之市、各置二称、懸於市門。私民所用之称、皆準市称以定輕重。

(17) 『旧唐書』武德四年七月、

廢五銖錢、行開元通宝錢、径八分、重二銖四(5)、積十文重一兩、一千文重六斤四兩。

『長編』卷二三、太平興国七年四月己丑、

詔。江南民私鑄鉛錫及輕小錢、頗乱禁法。自今公私所用、每千錢須及四斤、先著者悉送官。

(18) 彭前註(5)著書二一四頁。

(19) 私が調べたのは、清湯球輯『九家旧晋書輯本』(中州古籍出版社、一九九一年)である。

(20) 例えば、『晋書』卷一二二、載記、呂隆に「姑臧穀餼

踊貴、斗直錢五千文。」とある記事は、『資治通鑑』卷一二、元興元年二月癸丑条に「姑臧大饑、米斗直錢五千。」とある。『太平御覽』卷八三六、資産部錢に「竹林七賢伝曰、王戎女適裴氏、乏用遣女為貸錢數万文、而未還女婦、戎色不悅、女遽還錢乃憚。」とある記事は、『晋

書』卷四三、王戎伝では「女適裴頠、貨錢數万、久而未還。女後歸寧、戎色不悅、女遽還直、然後乃歛。」とある。また『晉書』卷一〇五、載記、石勒下に「建德校尉王和……又得一鼎、容四升、中有大錢三十文。曰百当千、千当万。」とある記事は、『太平御覽』卷八三六に「崔鴻十六国春秋後趙錄曰、趙王三年、得一鼎、容四升、中有大錢三十、文曰当千・当万。」とあり、『晉書』の文は大錢の枚数のようであるが（錢文として「百当千」「千当万」はおかしい）、『太平御覽』の文は錢文の意味である。

(21) 湖北省博物館「武漢地区四座南朝紀年墓」（『考古』一九六五・一四）に報告された陶買地券。郭沫若「由王墓誌的出土論到蘭亭序的真偽」（『文物』一九六五・一六）に拓片と釈文がある。それによると「買地価錢八万九千九百九十九文、畢了。」とあり、後代の定型的な価額が出現する。

(22) 以銀錢千文贖、錢一千文贖身及妻子、一千文贖奴婢、一千文贖六畜。（S四五二八 仁王般若經元榮題記 池田溫『中国古代写本識語集録』大蔵出版、一九九〇年、一一五頁）

(23) ・以金銀為錢、文為騎馬、幕為人面。（『漢書』卷九六上、西域伝、屬賓国）

・亦以銀為錢、文独為王面、幕為夫人面。（同右、安息国）

(24) 錢貨を枚で数える同時代資料として、升平五年（三六一）の記年をもつ晋の墓券に「故要糸一具錢七枚」とある。

る。史樹青「晋周芳命妻潘氏衣物券考釈」（『考古通訊』一九五六・一二）、湖南省博物館「長沙西晋南朝隋墓発掘報告」（『考古学報』一九五九・一三）。また前秦の建元二十年（三八四）ごろのものとして推定できる阿斯塔那三〇五号文書「缺名随葬衣物疏一」および「缺名随葬衣物疏二」に「銅錢二枚」とある。『吐魯番出土文書（卷）』（文物出版社、一九九二年）。文献資料では例えば後註（65）の①を参照。

(25) 彭前註（5）著書二一六頁。

(26) 高恭之上奏の時点は永安三年（五二八）である。これより以前太和五銖錢は年号をいれた五銖錢であるが、永平三年（五一〇）発行の錢は、年号を入れない五銖錢であった。（『魏書』卷一一〇、食貨志、洪遵『泉志』卷二、五銖錢）

(27) 『通典』卷九、錢幣、

孝武孝建初、鑄四銖、文曰孝建、一辺為四銖、其後稍去四銖、專為孝建。

(28) 李蔚然「試述漢、六朝墓中発現的錢貨」（『考古通訊』一九五七・一三）。

(29) 顔師古「漢書叙例」は、李妻を後漢と曹魏の注釈家の間に配列した上で「不詳所出郡県」と言う。

『漢書』卷二四下、食貨志、

又民用錢、郡県不同、或用輕錢、百加若干、或用重錢、平称不受。法錢不立。吏急而虐之虐、則大為煩苛、而力不能勝。縦而弗呵辱、則市肆異用、錢文大

乱。苟非其術、何郷而可哉。

(31) 彭信威氏は『史記』貨殖列伝にある「子貸金錢千貫」

の貫は萬字の誤りと推測する。前註(5)著書二二七頁。

(32) 山田勝芳氏は、「秦律十八種・金布律」、『漢書』卷六

元狩四年注、居延漢簡「四八四・一」を挙げ、国庫では一〇〇〇錢單位の括り方が一般的であつたのに対し、民間では一〇〇錢單位の括り方が一般的であるとする。

「後漢・三国時代貨幣史研究——古代から中世への展開——」(『東北アジア史研究』三、一九九九年)。秦律は、

官府受錢者、千錢一畚、以丞・令印印。不盈千者、亦封印之。錢善不善、雜糅之。出錢、獻封丞・令、乃発用之。百姓市用錢、美惡雜之、勿敢異。金布。

とあるものだが、一〇〇〇錢を一つの畚(かご)に入れるというもので、錢貫ではない。官府ではむしろバラバラの錢一〇〇〇枚をかごに入れ封印するのである。居延漢簡「四八四・一」には「吞遠部錢貫八枚」とあるが、錢貫が八つあるというだけで、一つの錢貫が何錢か不明であると同時に貫が貨幣單位であることも示していない。『漢書』卷六、元狩四年の李斐注については本文で述べた。私は秦漢時代に一般的な錢貫の内容が具体的に確認できる資料を見出していない。

(33) 『魏書』卷一一〇、食貨志、

魏初至於太和、錢貨無所周流、高祖始詔天下用錢焉。十九年、冶鑄粗備、文曰太和五銖。詔京師及諸州鎮皆通行之。内外百官祿準絹給錢、絹匹為錢二百。在

所遣錢工備爐冶、民有欲鑄、聽就鑄之、銅必精鍊、無所和雜。

(34) 『晉書』卷七〇、劉超伝によると、この話は中興(三

一七年)以後明帝の死(三二五年)までのこと。

(35) 後註(65)の①参照。

(36) 前註(30)参照。賈誼の上奏には、一〇〇錢の計量は、輕錢の場合、規定の重量に不足するとき一〇〇錢に幾ばくかを加え、重錢の場合は授受されないという。錢貨の計数的使用の原則が貫かれず重量を問題とする点で、その後の中国錢貨の性格と違ふ面のあることが注目される。このことは中国貨幣史を考察する場合重要な論点となるが、今は論じない。ここでは一〇〇錢が錢貫でまとめられたかどうかが問題であるが、一〇〇錢の組換えを輕錢は許し、重錢は認めないという以上、ある状態を確定するのであるから、錢貫を用いたと考えてよいだろう。しかし、重錢のとき、重量超過分の錢を控除すると通用しない以上、少なくとも短陌が成立していないことは分かる。

また『史記』卷五三、蕭相国世家(『漢書』卷三九、蕭何伝ほぼ同文)に見える漢高祖と蕭何の有名な逸話、高祖為布衣時、(蕭)何数以吏事護高祖。高祖為亭長、常左右之。高祖以吏繇咸陽、吏皆送奉錢三、何独以五。

の註釈を見ると『集解』は「李奇曰、或三百、或五百也。」「索隱」は「錢三百、謂他人三百、何独五百也。劉

高祖既受周禪、以天下錢貨輕重不等、乃更鑄新錢。

背面肉好、皆有周郭、文曰五銖、而重如其文。每錢一千、重四斤二兩。〔隋書〕卷二四、食貨志)

官錢の規定のほか、隋代には民間の私鑄錢も一〇〇〇枚の重量が計られるようになる。

大業已後、王綱弛紊、巨姦大猾、遂多私鑄、錢軋薄惡。初每千猶重二斤、後漸輕至一斤。〔隋書〕卷二四、食貨志)

また七五匁に及ぶ隋代の五銖錢が麻繩の錢貫で括られた状態で出土した例がある。報告書は「一縷の首尾」の形状を次のように記す。「一〇〇枚の銅錢ごとに一小貫をなし、二小貫を合わせて一聯をなし、上下の聯の間は花結びで隔たれ、順次に五聯をつなぎ、総計一〇〇〇錢となり、二〇〇〇錢ずつが結び合わされ一繫となる。」

私にはこの形状が今ひとつ分らないが、一〇〇枚ごとに結び目があり、二〇〇枚ごとに結び方が変わり、一本の錢貫でつらぬかれた一〇〇〇枚のまとまりが又た二つずつ連結されているようである。著者はこれがおそらく隋代の貨幣の括り方であろうと推測するが、私には最終的に一本の錢貫一〇〇〇枚が二本つながれ二〇〇〇枚にされる理由が分からない。しかし一〇〇〇枚で明確な区分があったらしいことから、一貫＝一〇〇〇文の実例と見てもよいと思われる。長沙市文物工作隊(宋少華執筆)「長沙發現隋代錢幣」(考古)一九八三(一)。

(41) 劉宋のとき沈慶之が私鑄錢を出して以後惡錢化がいっ

そう進み、一〇〇〇錢を錢貫に通すと長さはわずか三寸にも及ばなくなった(一千錢長不盈三寸)という有名な記述がある。後註(63)の①『宋書』卷七五、顏竣伝を参照。「一千錢」の部分について、『通典』卷九、『太平御覽』卷八三五は『宋書』に基づき同じであるが、『初學記』卷二七に引く梁婁子野『宋略』は「一貫」とする。一〇〇〇錢の長さが三寸という記述にはかなりの誇張があるが、それにしても誇張が大きすぎる。錢の厚さが一〇〇〇枚三寸なら、一枚は〇・〇七五mm程度にすぎず、これでは製作が不可能である。宋清錢は一〇〇枚で約一三cm、一枚平均一・三mm程度である。この記述が単なる修辭でなく、少しでも現実性を帯びるとすれば、「一百錢長不盈三寸」もしくは「一千錢長不盈三尺」とあるべきところを『宋書』が誤って伝えたと見るか、あるいは『宋略』の「一貫三寸」が正しく、しかも一貫は一〇〇錢の意味であると解するか、どちらかである。そうすれば一枚平均〇・七五mmとなり、ありえない数値でなくなる。私は史籍の文字の変更なしに理解できる点から言っても、『宋略』の一貫を採用し、その上で一貫を一〇〇錢と解することに魅力を感じるが、それはともかくとして、少なくとも『宋書』と『宋略』の記述を合わせて一〇〇〇錢が一貫であるということはできない。

また梁は当十の兩柱錢を鑄造した。一般に『周書』卷四七、姚僧垣伝の次の記事がそれと考えられている。

梁元帝平侯景、……梁元帝大喜。時初鑄錢、一當十、

乃賜錢十萬、實百萬也。

同じ記事が『北史』卷九〇、姚僧垣伝にもある。ところがそこには、

時初鑄錢、一当十、乃賜錢十萬貫、實百万也。

とあり、十万の後に貫字が加わっている。『周書』と

『北史』の違いはどちらかの誤りで、額が巨大になる

『北史』の方が誤りの蓋然性が高いと思われる。しかし

『北史』自体は、この部分に版本による字の異同がなさ

そうであり、特に不審をまねかず今まで伝えられている

以上、このままで解釈することも必要であろう。さて

『周書』の文章は「当十錢で十万枚賜与されたから、実

は百万錢の価値がある」との意味であるが、『北史』で

は「当十錢で十万貫賜与されたので、実際の枚数は百万

枚である」との意味になる。つまり、 $10\text{萬} \times 1000000 \text{錢}$

$\parallel 100000000\text{錢} (\parallel 10\text{萬})$ だから、一貫 \parallel 一〇〇錢であ

り、それ以外の解釈は不可能である。あくまで『北史』

に字の誤りがないとする場合であるが、具体的に貫の内

容が判明する資料は、このように一貫 \parallel 一〇〇錢を示す

のである。

(42) 黃留春「淺識漢魏許都故城窖藏銅錢」(『中国錢幣』一

九九二—二)。

(43) 大泉五百については、

・(嘉禾)五年春、鑄大錢、一当五百。詔使吏民輸銅、

計銅界直。設盜鑄之科。(『三国志』卷四七、吳主

伝)

・旧譜曰、徑寸二分、重十二銖、文曰大泉五百。余按

此錢徑寸一分、重四銖六參、今世有之。(『泉志』卷

二、大泉五百錢)

大泉当千については、

・赤烏元年春、鑄当千大錢。(『三国志』卷四七、吳主

伝)

・旧譜曰、徑寸四分、重十六銖、文曰大泉当千。余按

此錢有二品、大者徑寸五分、重十二銖六參、字文夷

漫、輪郭重厚、頗艱得之。小者徑寸三分、重七銖二

參、世多有之。(『泉志』卷二、大泉当千錢)

大錢の廃止については、

江表伝曰、是歲、(孫)權詔曰、謝宏往日陳鑄大錢、

云以広貨、故聽之。今聞民意不以為便、其省息之、

鑄為器物、官勿復出也。私家有者、勅以輸藏、計界

其直、勿有所枉也。(『三国志』卷四七、吳主伝、

赤烏九年条所引裴松之注)

(44) 王貴忱・劉志綱「三国孫吳鑄錢問題探討」(『中国錢

幣』一九八三—三)。

(45) 山田前註(32)論文。

(46) 魏晉南北朝時代の小錢には周辺を削った変造錢、変造

錢をもとにする錢范から鑄造した小錢があり、剪輪錢、

剪鑿錢、対文錢、磨辺錢、剪辺錢等さまざまな名称で呼

ばれている。これらの区別は必ずしも明確でなく、研究

者によって使い方が異なっている。謝世平氏は個人的な

見方と断つて磨辺・剪辺・対文の区分を試みている。謝

氏の試論は次のようである。磨辺五銖銭は完全な五銖銭をまとめて輪郭を削ったもので、一般の五銖銭より錢径が〇・一五〇・二cm小さく、錢重は三分の一(二g)ほど軽い(従って二・三g前後)。剪辺五銖銭は一枚ずつ剪刀で輪郭を削ったもので、大体の錢径は二・〇五・二・二cm、錢重は四〇%あるいはそれ以上軽い(従って二g以下)。対文五銖銭は綫環銭の内側で、一般に錢径は二cmに足らず、錢重は一・五g前後のものが多く、また対文五銖から錢范を制作し鑄造した鑄対文五銖銭があり、錢重は剪鑿された対文五銖よりもさらに軽い(淺談五銖磨辺、剪辺、對文的區別)『中国錢幣』一九八六一(一)。剪輪錢・剪鑿錢は輪郭を削った錢一般を指称するようである。

また鵝眼錢についても異論は多く、現在鵝眼錢と認められている錢が『宋書』顏竣伝(註(63)の①)に見える鵝眼錢と同じかどうかも確定していない。現在鵝眼錢と見なされている錢について言うと、錢径は一・七〜一cmで一・二cmのものが最も多く、錢重は一〇・二gで〇・五gが最も多い。錢文のない無文字錢が多いが、錢文のあるものは五朱の二字であるという。吳榮曾「鵝眼錢考辨」(『中国錢幣』一九九五一一)。

- (47) 劉建国・高嵐「三国呉錢初探」(『中国錢幣』一九八八年一)

- (48) 『長沙走馬樓三国呉簡・嘉禾吏民田家煎』(一九九九年、文物出版社)には、大錢が発行される前の嘉禾四年の記

述を含む簡も多い。さて走馬樓呉簡によると屯田の租は、米・布・錢で徴収される。錢について見ると、記載形式は、例えば「早畝收錢卅七、凡為錢四百五十五錢。」(四・五)となっているが、ここに言う錢は漢五銖以外に想定できない。そしてこのような形式の記載が単に錢額で収租額を記し米布で徴収されることもあるということを示すのではなく、実際に現錢で徴収したことは、米布で代納するときには「早田畝收錢卅七、其熟田畝收錢七十。凡為錢一千四百十五錢、准入米八斗八升。」(四・三一)と明確に區別して記載されることから分かる。報告書全体について、統計をとったわけではないが、現錢徴収それも漢五銖での徴収がかなりの額に上っているようである。

- (49) 莫洪貴「小議蜀漢『直百五銖』錢」(『中国錢幣』一九八六—三)、同「四川威遠出土大量『直百五銖』錢」(『文物』一九八一—二二)。直百五銖は激しく減重し、二〇分の一(約〇・四g)まで落ちた。

- (50) 彭信威氏は蜀漢の価値単位について、当初は五銖を單位としたが、直百五銖の採用後、直百五銖一枚を一〇〇錢とした、その後直百錢の減重にともない、また枚数を数えるようになったはずであり、その時期は直一の導入のときと推測する(前註(5)著書一九五頁)。直百の減価は五種錢との関係で短陌發生の条件があるが、資料上確認ができない。

- (51) 莫洪貴前註(49)論文「四川威遠出土大量『直百五

銖」錢」、四川省文物管理委員會「四川忠県涂井蜀漢崖墓」(『文物』一九八五・一七)。

(52) 張勛燦「從考古發現材料看三國時期的蜀漢貨幣」(『四川大學學報』一九八四・一)によると、蜀錢は四川を除くと、北方では殆どすべて西晋南北朝時代に埋藏されたものであるのに対し、南方の長江流域では三國時代に埋藏されたものが多く、しかも数量も多いという。

(53) 劉・高前註(47)論文「三國吳錢初探」は、両氏の手になる「試論六朝錢帛二本位貨幣制」(江蘇省錢幣学会一九八六年学会論文——ただし私は未見)を引用し、江蘇・浙江・安徽・江西等の晋墓の統計では、漢錢のみ出土したのは九座、漢錢と三國錢が同時に出土したのは六座、三國錢のみの出土は五座であるという。

(54) 『晋書』卷二六、食貨志、晋自中原喪乱、元帝過江、用孫氏旧錢、輕重雜行。大者謂之比輪、中者謂之四文。吳興沈充又鑄小錢、謂之沈郎錢。錢既不多、由是稍貴。

(55) 『晋書』卷二六、食貨志、安帝元興中、桓玄輔政、立議欲廢錢用穀帛。孔琳之議曰、……愚謂救弊之術、無取於廢錢。朝議多同琳之、故玄議不行。

(56) 安田前註(9)論文「東晋・南朝初期の通貨問題をめぐって」。

(57) 大小の貨幣が混在して錢貫でまとめられた形跡がある例に、鎮江市博物館「蘇丹徒東晋窖藏銅錢」(『考古』

一九七八・二)、謝世平「安陽出土南北朝古錢窖藏」(『中原文物』一九八六・三)がある。なお後者は北朝の領域(河南省安陽市)で、出土錢貨に北齊の常平五銖錢があることから北朝末期の事例である。そこでも貨幣重量は貨幣価値の根拠でないことが結論されている。

(58) 『宋書』卷五、元嘉七年十月戊午、立錢署、鑄四銖錢。

四銖錢の鑄造は當時最も主要な通貨である漢五銖が往々にして剪鑿された事態に対処したものと考えられる。もし新たに五銖錢を鑄造したら剪鑿を免れないと予想されるからである。その成果は上がったようである。

元嘉中、鑄四銖錢、輪郭形制、与古五銖錢同価無利、百姓不資盜鑄。(『通典』卷九、錢幣)

とある。但し、四銖錢ものにちに減重して鑄造された。

張台曰、捫所見、背面皆有周郭、径七分、重二銖已下、文甚分明。旧譜曰、文曰四銖、重如其文。余按此錢径七分、重二銖四參、肉薄好闊、背面皆有周郭、字文甚明。(『泉志』卷二、四銖錢)

(59) ①以貨貴、制大錢、一当兩。(『宋書』卷五、元嘉二十四年六月是月)

②裴子野宋略曰、文帝元嘉二十四年六月、初行大錢、一当細錢兩、既而錢形不一、民弗之便。明年五月己卯、罷当兩大錢。旧譜曰、重八銖、文曰五銖。(『泉志』卷二、当兩大錢)

③(元嘉)二十四年、録尚書江夏王義恭建議、以一大

錢当両、以防翦鑿、議者多同。(何)尚之議曰、：況復以一当両、徒崇虚価者邪。凡創制改法、宜從民情、未有違衆矯物而可久也。……又錢之形式、大小多品、直云大錢、則未知其格。若止於四銖五銖、則文皆古篆、既非下走所識、加或漫滅、尤難分明、公私交乱、争訟必起、此最是其深疑者也。……吏部尚書庾炳之、侍中太子左衛率蕭思話、中護軍趙伯符、御史中丞何承天、太常郗敬叔並同尚之議。中領事沈演之以為、……晋遷江南、疆境未廓、或土習其風、錢不普用、其數本少、為患尚輕。今王略開広、声教遐暨、金鎰所布、爰逮荒服、昔所不及、悉已流行之矣。用彌広而貨愈狭、加復競翦鑿、銷毀滋繁、刑禁雖重、姦避方密、遂使歲月增貴、貧室日虚、……愚謂、若以大錢当両、則国伝難朽之宝、家贏一倍之利、不俟加憲、巧源自絶、施一令而衆美兼、無興造之費、莫盛於茲矣。上從演之議、遂以一錢当両、行之經時、公私非便、乃罷。(『宋書』卷六六、何尚之伝)

③の記事は江夏王義恭による大錢当両の建議、何尚之の反対意見、庾炳之らの何尚之に対する賛成意見、沈演之の江夏王義恭に対する賛成意見からなり、注目すべき点が多い。大錢当両の建議・賛成論は剪鑿防止のためには大錢と小錢を区別し、大錢の額面を二倍にすることが必要であるという意見であり、反対論は虚価にすぎず混乱を招くという意見である。賛成・反対の意見とも共通

する事実認識は、社会では大小にかかわらず等価であるということである。なおこのときの大錢には、四銖錢の含まれることは何尚之の意見から判明する。

(60) 以上は前註(59)の③参照。

(61) ・鑄二銖錢。(『宋書』卷七、永光元年二月庚寅)

・旧譜曰、此錢、文曰二銖、重如其文。(『泉志』卷二、二銖錢)

・前廢帝即位、鑄二銖錢、形式軀細。官錢每出、人間即模効之、而大小厚薄、皆不及也。無輪郭、不磨鑿、如今之剪鑿者、謂之耒子。(『宋書』卷七五、顏竣伝)

・顧烜曰、宋中廢帝景和元年鑄。重二銖、文曰景和。其年還用古錢。(『泉志』卷二、景和錢)

二銖錢と景和錢は錢文を異にするが何れも二銖錢である。永光元年と景和元年は同年である。

(62) 『宋書』卷七、永光元年九月戊午、開百姓鑄錢。

(63) ①景和元年、沈慶之啓通私鑄、由是錢貨乱敗。一千錢長不盈三寸、大小称此、謂之鵝眼錢。劣於此者、謂之經環錢。入水不沈、随手破碎、市井不復料數、十

万錢不盈一掬、斗米一万、商貨不行。太宗初、唯禁鵝眼・經環、其餘皆通用。復禁民鑄、官署亦廢工、尋復並斷、唯用古錢。(『宋書』卷七五、顏竣伝)

②斷新錢、專用古錢。(『宋書』卷八、泰始二年三月壬子)

(64) 『宋書』卷八一、劉秀之伝、

(元嘉)二十五年、……時漢川饑饉、境内騷然、

(劉)秀之善於為政、躬自儉約。先是漢川悉以絹為貨。秀之限令用錢、百姓至今受其利。

(65)

①顧烜曰、天監元年鑄、徑一寸、文曰五銖、重四銖三參二黍、每百枚重一斤二兩。張台曰、五銖錢皆無好郭、唯此一種有之。(『泉志』卷二、五銖錢)

②顧烜曰、天監元年、鑄公式女錢、徑一寸、文曰五銖、

稱兩如新鑄五銖、但刃無輪郭、未行用、又聽民間私鑄、以一萬二千易取上庫古錢一萬、以此為率。普通

三年、始興新鑄五銖、並行用、斷民間私鑄。張台曰、背有好郭者、謂之公式女錢。背無好郭者、正謂之女錢。蓋聽民私鑄、有不精也。(『泉志』卷二、公式女錢)

(66)

・用給事中王子雲議、始鑄鉄錢。(『南史』卷七、普通四年十二月戊午)

・顧烜曰、五銖鉄錢、徑一寸一分、文曰五銖、背為四出文。余按此錢、今世有之、輪郭重厚、字蹟微漫、背文四出、徑七分、重三銖六參。(『泉志』卷二、五銖鉄錢)

・顧烜曰、普通四年鑄大吉鉄錢、大小輕重如(五)銖、文曰五銖大吉、背文四出。(『泉志』卷二、大吉鉄錢)
・顧烜曰、普通四年鑄大通鉄錢、大小輕重如五銖、文曰五銖大通、背文四出。(『泉志』卷二、大通鉄錢)
・顧烜曰、普通四年鑄大富鉄錢、大小輕重如五銖、

(文曰五銖)大富、背文四出。(『泉志』卷二、大富

錢)

(67) 前註(41)『周書』『北史』の姚僧垣伝を参照。

(68) 『梁書』卷六、太平二年四月、

己卯、鑄四柱錢、一准二十。……壬辰、改四柱錢、一准十。丙申、復閉細錢。

(69) 『隋書』卷二四、食貨志、

陳初、承梁喪亂之後、鉄錢不行。始梁末又有兩柱錢及鵝眼錢、于時人雜用、其值同、但兩柱重而鵝眼輕。私家多鎔錢、又間以錫鉄、兼以粟帛為貨。

四柱錢は兩柱錢の形制の差異は、四柱錢が表面の上下に二星、裏面の左右に二星があるのに対し、兩柱錢は表面の上下に二星あるだけの違いである(朱活『古錢辭典』下、三秦出版社、一九九一年、二三五頁等の図録を参照)。兩柱錢が鵝眼錢と等価であるなら四柱錢も同様である。

(70) 『南史』卷二五、到溉伝に、

後為建安太守、(任)昉以詩贈之、求二衫段云、鉄錢兩当一、百代易名実、為惠当及時、無待涼秋日。とあるのは、民間における鉄錢と銅錢の比価が二対一であること、鉄錢の価値低下を示している。なお鉄錢と銅錢の比価を短陌と見ることはできない。

(71) 前註(69)を参照。

(72) 『通典』卷九、錢幣、
梁初、唯京師及三吳・荊・鄧・江・湘・梁・益用钱。

其餘州郡、則雜以穀帛交易。交・広之域、則全以金

銀爲貨。武帝乃鑄錢、肉好周郭、文曰五銖、重四銖

三參二黍、其百文則重一斤二兩。又別鑄、除其肉郭、

謂之公式女錢、徑一寸、文曰五銖、重如新鑄五銖、

二品並行。百姓或私以古錢交易者、其五銖徑一寸一

分、重八銖、文曰五銖、三吳屬吳行之。女錢徑一寸、

重五銖、無輪郭、郡県皆通用。太平百錢二種、並徑

一寸、重四銖、源流本一、但文字古今之殊耳、文並

曰太平百錢。定平一百、五銖、徑六分、重一銖半、

文曰定平一百。稚錢五銖、徑一分半、重四銖、文曰

五朱、源出於五銖、但狹小、東境謂之稚錢。五銖錢、

徑七分半、重三銖半、文曰五朱、源出稚錢、但稍遷

異、以銖爲朱耳、三吳行之、差少於餘錢。又對文錢、

其源未聞。豐貨錢、徑一寸、重四銖、代人謂之富錢、

藏之令人富也。布泉錢、徑一寸、重四銖半、代謂之

男錢、云婦人佩之即生男也。此等輕重不一。天子頻

下詔書、非新鑄二種之錢、並不許用。而趨利之徒、

私用軋甚。

なおこの記事は『隋書』卷二四にもあり、内容が必ずし

も一致しないが、ここでは詳細な『通典』を採用する。

(73) 『隋書』卷二四、食貨志、

至文帝天嘉五年、改鑄五銖。初出、一当鵠眼之十。

宣帝太建十一年、又鑄大貨六銖、以一当五銖之十、

与五銖並行。後還当一、人皆不便。乃相与訛言曰、

六銖錢有不利県官之象。未幾而帝崩、遂廢六銖錢而

行五銖。竟至陳亡。

(74)

①竟陵王子良啓曰、伏尋三吳内地、国之関輔、百度所

資。……頃錢貴物賤、殆欲兼倍。……所以然者、実

亦有由。年常歲調、既有定期、僅卹所上、咸是見直。

東間錢多剪鑿、鮮復完者、公家所受、必須員(圓)

大、以兩代一、困於所買、鞭捶質繫、益致無聊。

(『南齊書』卷二六、王敬則伝)

②子良又啓曰、……又泉鑄歲遠、類多剪鑿、江東大錢、

十不一在。公家所受、必須輪郭(完全)、遂買本一

千、加子七百、猶求請無地、極革相繼。(『南齊書』

卷四〇、武十七王、子良)

いづれも竟陵王子良の発言であり、ほぼ同じ事態を伝え

(75)

『南齊書』卷三七、劉俊伝、

永明八年、(劉)俊啓世祖曰、……上從之。遣使入

蜀鑄錢、得千餘万、功費多乃止。

このとき鑄造された銅錢の形制がどのようなものか疑問

が多いが、彭信威氏によると、大きさは稚錢とほぼ同じ

で文字はきちんとし、劉宋の孝建四銖と似たものという。

(76)

前註(5)著書二一八〜二一九頁。

前註(74)の①に「頃錢貴物賤」とあり、最近の物価騰

貴の原因として、円大な錢の納入が述べられているのも、

特殊な事態であることの傍証となる。

(77)

太和五銖の発行の事情およびその後の貨幣政策の変遷

については、内田吟風「後魏通貨に関する二三の問題」

『研究』二二、一九六〇年、『北アジア史研究——鮮卑柔然突厥篇——』同朋舎、一九七五年、所収）を参照。また前註（33）を参照。

(78) 後趙の石勒が豐貨錢を發行（『晋書』卷一〇四、石勒上、文獻には見えないようだが前涼の涼造新錢が知られている。また華北ではないが四川の成漢が漢興錢を發行した（李佐賢『古泉匯利集』卷五、彭前註（5）著書二一六頁）。なお『古泉匯』には他の五胡時代の錢の記載もある。豐貨錢・涼造新錢・漢興錢は朱活前註（69）『古錢辭典』、『上海博物館藏錢幣・魏晉隋唐錢幣』（上海書畫出版社、一九九四年）に図版がある。

(79) 『魏書』卷一一〇、食貨志、

熙平初、尚書令任城王澄上言、……太和五銖雖利於京邑之肆、而不入徐揚之市。土貨既殊、貿鬻亦異、便於荆郢之邦者、則礙於兗豫之域。……去永平三年、都座奏斷天下用錢不依準式者、時被敕云、不行之錢、雖有常禁、其先用之処、權可聽行、至年末悉令斷之。延昌二年、徐州民儉、刺史啓奏求行土錢、旨聽權依旧用。謹尋不行之錢、律有明式、指謂鷄眼・鑿鑿、更無餘禁。計河南諸州、今所行者、悉非制限。昔來繩禁、愚窃惑焉。又河北州鎮、既無新造五銖、設有旧者、而復禁斷、並不得行、專以單糸之縑、疏縷之布、狹幅促度、不中常式、裂匹為尺、以濟有無。至今徒成杼軸之勞、不免飢寒之苦、良由分截布帛、壅塞錢貨。……愚意謂今之太和与新鑄五銖、及諸古錢

方俗所使用者、雖有大小之異、並得通行。貴賤之差、自依鄉俗。庶貨環海內、公私無壅。其不行之錢、及盜鑄毀大為小、巧偽不如法者、挾律罪之。詔曰、錢行已久、今東尚有事、且依旧用。

(80) 宮澤前註（2）著書一四二一頁。

(81) 以上は主として前註（79）による。また『魏書』卷一一〇、食貨志によると、

澄又奏、……臣比奏求宣下海內、依式行錢。登被旨勅、錢行已久、且依旧用。謹重参量、以為太和五銖乃大魏之通貨、不朽之恒模、寧可專貿於京邑、不行於天下。但今戎馬在郊、江疆未一、東南之州、依旧為便。至於京西・京北域內州鎮未用錢処、行之則不足為難、塞之則有乖通典。何者。布帛不可尺寸而裂、五穀則有負擔之難。錢之為用、貫緡相属、不仮斗斛之器、不勞秤尺之平、濟世之宜、謂為深允。請並下諸方州鎮、其太和及新鑄五銖併古錢内外全好者、不限大小、悉聽行之。鷄眼・鑿鑿、依律而禁。河南州鎮先用錢者、既聽依旧、不在斷限。唯太和・五銖二錢得用公造新者、其餘雜種、一用古錢、生新之類、普同禁約。諸方之錢、通用京師、其聽依旧之処、与太和錢及新造五銖並行、若盜鑄者罪重常憲。既欲均齊物品、廩井斯和、若不繩以嚴法、無以肅茲違反。符旨一宣、仍不遵用者、刺史守令依律治罪。詔從之。而河北諸州、旧少錢貨、猶以他物交易、錢略不入市也。

とあり、後に盜鑄は禁じられた。

(82) 『魏書』卷七七、高崇伝、

於時用錢稍薄、(高)道穆表曰、四民之業、錢貨爲本、救弊改鑄、王政所先。自頃以私鑄薄濫、官司糾繩、挂網非一。在市銅價、八十一文得銅一斤、私造薄錢、斤餘二百。既示之以深利、又隨之以重刑、罹罪者雖多、姦鑄者彌衆。今錢徒有五銖之文、而無二銖之實、薄甚榆莢、上貫便破、置之水上、殆欲不沈。……宜改鑄大錢、文載年号、以記其始。則一斤所成、止七十六文。銅價至賤、五十有餘、其中人功・食料・錫炭・鉛沙、縱復私營、不能自潤。直置無利、自應息心、況復嚴刑広設也。以臣測之、必當錢貨永通、公私獲允。後遂用楊侃計、鑄永安五銖錢。

銅一斤(三八四銖)で七十六文を鑄造すると、一文あたり、五・〇五銖となる。

(83) 『魏書』卷一一〇、食貨志、

至永安二年秋、詔更改鑄、文曰永安五銖、官自立爐、起自九月至三年正月而止。官欲貴錢、乃出藏絹、分遣使人於二市売之、絹匹止錢二百、而私市者猶三百。利之所在、盜鑄彌衆、巧偽既多、輕重非一、四方州鎮、用各不同。

絹一匹に対する錢相場は、官で二〇〇錢、民間で三〇〇錢であるから、官の方が高い。

(84) 前註(79)を参照。

(85) 『東魏』齊神武霸政之初、承魏猶用永安五銖。遷鄴已

後、百姓私鑄、体制漸削、遂各以爲名。有雍州青赤、梁州生厚・緊錢・吉錢、河陽生洪・天柱・赤牽之稱。冀州之北、錢皆不行、交易者皆以絹布。神武帝乃收境內之銅及錢、仍依旧文更鑄、流之四境。未幾之間、漸復細薄、姦偽競起。(『隋書』卷二四、食貨志)

〔西魏〕(大統六年二月)鑄五銖錢。

〔大統十二年三月〕鑄五銖錢。(以上『北史』卷五)

〔北齊〕文宣受禪、除永安之錢、改鑄常平五銖、重如其文。其錢甚貴、而制造甚精。至乾明・皇建之間、往々私鑄。鄴中用錢、有赤熟、青熟、細眉、赤生之異。河南所用、有青薄鉛錫之別。青・齊・徐・兗・梁・豫等州、輩類各殊。武平以後、私鑄軋甚、或以生鉄和銅。至於齊亡、卒不能禁。(『隋書』卷二四、食貨志)

〔北周〕後周之初、尚用魏錢。及武帝保定元年七月、及更鑄布泉之錢、以一当五、与五銖並行。時梁益之境、又雜用古錢交易。河西諸郡、或用西域金銀之錢、而官不禁。建德三年六月、更鑄五行大布錢、以一当十、大取商估之利、与布泉錢並行。四年七月、又以辺境之上、人多盜鑄、乃禁五行大布、不得出入四閩、布泉之錢、聽入而不聽出。五年正月、以布泉漸賤而人不用、遂廢之。齊平已後、山東之人、猶雜用齊氏旧錢。至宣帝大象元年十一月、又鑄永通万国錢。以一当十、与五行大布及五銖、凡三品並用。(『隋書』卷二四、食貨志)

北周の永通万国錢について当千と伝える文献も多いが、当千は北朝貨幣史の流れ、当五の布泉・当十の五行大布との額の釣り合い、錢の大きさ（『泉志』卷二によると五行大布（一寸一分）より大きい（一寸三分）際立った大きさではない）などの点から判断して当十が正しいと思う。彭前註（5）著書は、永通万国錢を当十と認めた上で、五行大布もしくは五銖錢のいづれに對して当十であるかはつきりしないとする（二三〇頁）。私は五銖錢に對する当十でなければならぬと思う。

（86）謝世平前註（57）論文「安陽出土南北朝古錢窖藏」。

（87）前註（57）論文「江蘇丹徒東晉窖藏銅錢」および謝世平前註（57）論文。

（88）吉田虎雄『魏晉南北朝租税の研究』（大阪屋号書店、一九四三年）は、魏晉南北朝時代の租税制度の主要を知る上で非常に有用な研究だが、見錢收入があるかないかに着目して引用された資料を点検すると、華北王朝では西晉より後、北魏の幣制導入までの間、見錢收入の例を見出せないのに対し、南朝では一貫して各種の税に例がある。

（89）銅錢の鑄造に消極的だった南齊でも租税納入に銅錢を求めたことは前述したが、「泉貝は絶域に傾く」（『南齊書』卷三、永明五年九月丙午）、すなわち錢が辺境に偏在し、中心地域では乏しくなった。そこで「京師及び四方、錢億万を出し、米穀絲綿の属を糴す」（同右）こととなった。一億万の内訳は、『通典』卷一二、輕重に記

録され、京師五〇〇〇万、揚州一九一〇万、南徐州二〇〇万、南荊河州二〇〇万、江州五〇〇万、荊州五〇〇万、鄧州三〇〇万、湘州二〇〇万、司州二五〇万、西荊河州二五〇万、南兗州二五〇万、雍州五〇〇万、計一〇〇六〇万錢である。大規模な市糴によって国庫の銅錢を民間に放出した政策である。これは臨時的なものだが国家と社会の間の物流が錢貨によって担われている典型的な事例である。

（90）『魏書』卷一一〇、食貨志、

（太和十九年）内外百官禄、皆準絹給錢。

（91）例えば、『魏書』卷一一〇、食貨志、

孝昌二年冬、……又税市、入者人一錢、其店舍又為五等、收税有差。

（92）『隋書』卷三四、食貨志、

（開皇）三年四月、詔四面諸關、各付百錢為樣。從関外来、勘樣相似、然後得過。樣不同者、即壞以為銅、入官。詔行新錢已後、前代旧錢、有五行大布・永通万国及齊常平、所在用以貿易不止。四年、詔仍依旧不禁者、畧令奪半年祿。然百姓習用既久、尚猶不絕。五年正月、詔又嚴其制。自是錢貨始一、所在流布、百姓便之。是時見用之錢、皆須和以錫鐵。錫鐵既賤、求利者多、私鑄之錢、不可禁約。其年、詔乃禁出錫鐵之處、並不得私有採取。十年、詔晉王庑、聽於揚州立五鑪鑄錢。其後姦狡漸磨鑪鑄錢郭、取銅私鑄、又雜以錫錢、通相放効、錢遂輕薄。乃下惡錢之

禁。京師及諸州邸肆之上、皆令立榜、置樣為准。不中樣者、不入於市。十八年、詔漢王諒、聽於并州立五鐮鑄錢。是時江南人間錢少、晉王広又聽於鄂州白紵山有銅鑛處、鑄銅鑄錢。於是詔聽置十鐮鑄錢。又詔蜀王秀、聽於益州立五鐮鑄錢。是時錢益濫惡、乃

令有司、括天下邸肆見錢、非官鑄者、皆毀之、其銅入官。而京師以惡錢貿易、為吏所執、有死者。數年之間、私鑄頗息。
(93) 宮澤「中国專制国家財政の展開」(『岩波講座世界歴史』九、中華の分裂と再生、岩波書店、一九九九年)。

〔付記〕 本稿は一九九九年度佛教大学特別研究助成による研究成果の報告である。